

1月総評

西躰 かづよし

おとうとの冬
の
こどうを聴きながら
かむばねるらのようになむった

さいう 石川県

日常の一コマが、奥行きのある童話の世界へと変わる。巧みな行替えや、ひらがなと漢字の使い分けは、読者をその世界に誘う装置と言ってもいい。日々が生の躍動感を持って語られることで、読み手もまた、生の実感を取り戻すのかもしれない。

「親友とわかれて／坂をくだる日の／あっぷるぱいのような夕暮れ」
こちらも同じ作者の作品。

羊みな耳標を持って冬茜

ムクロジ 群馬県

羊が飼われている様子を詠ったものだろうか。耳標とは、家畜の個体識別のため耳につける標識のこと。「持って」と書かれていることから、羊たちはそれを持つことを自身で選んだという風にも読める。そうした運命を受け入れているようにも。だからこそ読み手は羊に共感するのだと思う。

標識を持っておのの存在する羊たち。冬茜という季語がよく似合う。

うつむいたあなたの
木陰におさまれば
すこしやさしく見える過去問

川上 真央 東京都

「あなたの木陰」という一節から、ようやくうつむいたあなたが、木であることに気付く。この作品から伝わるやさしさは、同情や、なぐさめといった人とのあいだに生まれるものとは異なる。木と等価なものとして置かれる自分自身。

過去問がやさしく見えたのは、語り手が自然そのもの内にあったからだろう。それが日々のなかのささやかな安らぎへとつながっている。

おろしたての
パフスリープのふくらみに
ひかりをいれて象を見にゆく

石村まい 兵庫県

この書き手は目や耳がいいんじゃないかと思う。同じ書き手の作品にこんなのもある。

「からくりのように／失くなるものばかり／点滴の日は雪がしづかだ」

でもそれはいいことばかりじゃなかったかもしれないとも思う。ふつうの人よりもおおくのものを見て、おおくのことを聞くのは、それほど楽ではないだろうから。だからだろうか、作品からは失われそうなものに対するやさしいまなざしが感じられる。象を見に行くということのなかに、かけがえのなさが感じられるのは偶然ではないだろう。

冬すみれ 初診予約は半年後

あお 奈良県

半年後の初診とはどういうことなのだろう。発達障害の診断や、精神科の初診は、需要に対する供給が足りないことから、半年待ちということも普通にあるらしい。けれど、もしそうした理由があると分かっても、やっぱりそれはどういうことだろうと思う。それは結局、置いてきぼりにされる半年だと思うから。

ただ、冬すみれは、そのことをしづかに受け入れているように見える。

この作品の美しさは、置いてきぼりにされた時間を受け入れる、その在り様にあるのかかもしれないと思う。

つまらないくらいに
海が広がっていました
僕は高校生です

橋口 諒介 東京都

高校生というのは、つまらない季節の代表かもしれない。周りの大人は可能性あふれる年頃なんて言うかもしれないけれど、自身の能力なんか簡単に相対化されるし、別に自分ひとりくらいなくたって全然世界は、うまく回っていくし。そんな気持ちが、広がる海には、満載されている。

でも、もし語り手に言えることがひとつあるとするなら、あの頃に戻れると言わせて、決して戻りたくはない季節が、ひとつくらいあってもいいということ。だからだろうか作中の高校生ということばが妙に輝いて見える。

まばたきに誘いこまれて
リハビリの海がある
あまり青くない海

いちかわ 広島県

リハビリの海とはどんな海だろう。語り手はそれを「あまり青くない」と表現する。ただ「まばたきに誘いこまれて」という一節からは、実在の海というより、かつての海を想起させる。

その海は今でもリハビリを余儀なくされているのだろうか。そこには永遠にも思える長い時間が横たわっている。

ふたつめの信号変わり冬の星

azusa 京都府

変わるのはひとつめの信号ではなくて、ふたつめの信号。それは、わずかに届かない時間想起させる。そんな変わらない信号を待つわずかな間だからこそ、冬の星は輝いて見えたのかもしれない。

冬の日のエコー写真はぼんやりと
クリアファイルに挟まれた海

常田 瑛子 山口県

エコー写真は、おなかの赤ちゃんの様子を確認する際や、病気の検査の時によく用いられるけれども、この作品の語りからは、うれしさや、期待は伝わってこない。むしろ無機質な質感の海だけが残されたような錯覚に陥る。

クリアファイルに挟まれた海となったエコー写真に驚かされたのだろうか。それとも、どんな結果も、海のようなものでしかないということに驚かされたのだろうか。

スカートに海が欲しくて襞よせる

桜庭 紀子 和歌山県

スカートに海が欲しくなるとき。海辺をあなたと走ったとき。スカートに海が欲しくなるとき。子どものころに戻ったとき。スカートに海が欲しくなるとき。母の声を見つけたとき。と、作品から、いろいろな想像が膨らむ。

スカートの海が、読者の心をつかんで離さないのは、それが、誰もがかつて体験した、とおい記憶と結びついているからなのかもしれない。